

## 論文要約

本論は、漆芸における形態と文様を別個のものとして、両者を融合させながらそれぞれを発展させるにはどうしたら良いかという問題を、自作における形態、文様、プロセスを再考することによって「加飾」の観点から考察したものである。

従来、個別的制作プロセスとして捉えられていた形態の成型作業と、「塗る」、「研ぐ」という下地工程、及び「描く」、「蒔く」等を中心とする加飾工程を相互に絡み合わせ、そこから生じる偶発性を取り込みながら、新たな表現の可能性を求めた。

その結果、筆者は「塗る」「研ぐ」という行為を、従来のように下地工程であるとは考えず、加飾のプロセスの一部と捉え直し、その一連のプロセスを新たな加飾の可能性として提示した。また、このような筆者の表現行為を背後で支えているのは、自由な「遊び」の精神である。

本論では、筆者のこれまでの制作を、第1期「文様・形態のあそび」、第2期を制作上での諸問題を「再考・葛藤」した時期、第3期を「文様・形態・プロセスのあそび」といった3つの時期に大別し、具体的な作例をあげながら「素材」「形態」「行為」「プロセス」「文様」について再考した。

第1期は、文様・形態と戯れた時期であり、筆者は、自作の具象的形態から文様のイメージを引き出していった。ここでの筆者の遊びは、形態よりも文様の視覚的表現にあり、モチーフに関連するイメージの中から自身の趣味趣向にあう文様を選択した。その際、それらの多くは、筆者にとって現実味のある同時代性の高い文様であり、本論ではそれを「現代的文様」と称した。文様に作り手と同時代の要素が反映されることは、時代を問わず行われてきたことであり、筆者の作品に見られるマンガなどの日常的な文様もまた、その一例である。

続く第2期では、制作上の諸問題を再考し、葛藤した時期をとりあげた。この時期、筆者の遊びは、形態や文様に向けられると共に、「素材」や「技術」などにも向けられた。

様々な方法を試みるうちに、形態と文様において変化が生じた。特に形態はこれまでよりも複雑になり、抽象化した。このように形態が具象性を失っていった結果、文様を想起するための具体的な主題を、形態から引き出すことが難しくなり、形態とは直接関係のない筆者の私的出来事を文様化したものが形態の表面に描かれるようになった。この時点で、形態と文様を結びつけるものが希薄になり、両者は徐々に乖離していった。これが、形態と文様の関係に生じた「葛藤」であった。この葛藤によって、文様として何を描

くかということから、描く「行為」そのものへと視点を移していくことになり、制作プロセスがどうあるべきかを再考することに繋がった。

第3期は、文様・形態・プロセスと戯れた時期であった。先述した「葛藤」を克服する上で筆者が重要視したのは、形態と文様をそれぞれ発展させつつ、両者の距離を近づけるためにはどうしたらよいかという問題であった。その問題を抱きながら、「素材」「形態」「技術」「行為」「プロセス」「文様」について再考し、自身における新しい加飾の在り方を探究した。

先述の筆者の葛藤を検証、探求するために漆芸の枠組みを再考していった結果、漆芸における「研ぎ破り」が、この葛藤を克服する契機となった。研いだ結果下地が見えてしまう「研ぎ破り」は、従来研ぎの工程での避けるべき現象であるが、筆者はこの「研ぎ破り」を失敗ではなく、形態に伴ってできた表情として捉え直すことで加飾の可能性を考えた。

こうして「研ぎ」に対する意識を変えた結果、美しく研ぎあげるための「塗り」の作業は、より自由な「描く」行為へと変換され、塗膜をつくることに新たな意味合いが生まれた。また、研ぎの失敗を恐れて造形意欲を抑えることの必要性がなくなり、研ぎの技術に捕らわれずに形態を模索ことが可能になった。さらに、研ぎ破りによって現れた表情を文様に見立て、そこに加飾することで、施された文様などは自ずと形態に連動した在り方となった。

従来の漆芸における制作プロセスは、形態を成型する工程、下地工程、加飾工程の3つに大きく分業されており、それぞれが別個の工程となっていたといえる。しかし、筆者は「研ぎ破り」の在り方を再考することで、「形態」と、従来下地工程とされてきた「塗り」や「研ぎ」という行為と、従来加飾とされてきた「描く」「蒔く」「埋める」という行為を密接に結びつけた。こうした新たな表現に向かって連動させた工程を、広義の「加飾」行為として捉え直し、そこに現代の漆芸に寄り添った加飾の新たな可能性を見いだした。

筆者にとって、第1期の制作の力点は、文様と戯れることにあった。しかし第2期において、素材や技法、制作プロセスに関して深く考えるうちに、文様だけでなく素材とも戯れるようになった。そして、第3期になって、それらを如何に結びつけるかという点に、筆者の遊びの重点が移っていった。換言すれば、既存の枠組みを飛び越えて、「形態」と、「塗る」、「研ぐ」という行為と、「文様」を「描く」、「蒔く」などの行為を綯い交ぜにして自由に戯れること、それこそが筆者が見出した、加飾の新たな可能性である。